

特42

460

鴻

東 京 圖 書 館

三
二
冊

三
號

四
七
架

函

音
樂
類

和
書
門



ハ 鴻
南ノ海原ヤヅクバ 鴻ノ浦
是ハ都方より也

僧より採来四函を云ひの程よ

此度思ひ立西國行跡と云はれり
云々震るる浪乃たふらみ毎ツク

つ日の雲も影うして其方の空

と行路よりくつし 舟毎路へて 鴉
の浦よききりりく 急行よ是の也

讃岐の國ハ鴉の浦よききりて 目乃
ききりて 是は 塩屋よききりて 良を

明さるやと思ふ 面自や月海

とよきりて 波濤吹火は 飯より

漁翁よ 西岸よききりて 宿とあつりて

湘水とゆく 楚行をとくも 今よ

志しりて 芦花の陰ほりみりて

おとらよ 月のお堀のたきりて 飯

震のききりて 舟よききりて あまの岸

声しりて 舟よききりて 一葉萬里の舟の

道一航の凡よききりて 夕の雲乃

ちの浪月此行は 立消て ありて

ふ松原の蔭ハ緑まじりて海鳥
さきもさきぬは境港の海も
さきもさきぬは境港の海も
家方もねまよ^上釣^上の魚もなま
うつく霞つらして仲かたあゆ
おぼろほつくとみくさるる浦
風も長閑なまは境港く

^早出^早の境港の葉もまよるる
境港のまよるる葉もまよるる
葉もまよるる葉もまよるる
一見の僧もまよるる葉もまよるる
皆は海へまよるる葉もまよるる
何れも一見の僧もまよるる葉もまよるる

見ざるは人の心なりと見ざる
程にお客の心は由りては富
乃ち心は人の心なりと見ざる
程にお客の心は由りては富
見ざるは人の心なりと見ざる
方乃ち者なりて此浦始りて一見の事
さくは日なりと見ざるは由りては富

は中へは人の心なりと見ざる
様人の心なりと見ざるは由りては富
平の一夜と見ざるは由りては富
都の人なりと見ざるは由りては富
は中へは人の心なりと見ざる
は中へは人の心なりと見ざる
は中へは人の心なりと見ざる
は中へは人の心なりと見ざる
は中へは人の心なりと見ざる

うらむるに大將軍のはなはたの赤

地の錦めしつたよ紫とこの御

着宵鐘ちつらつらにさよりのま

すく一院の使客のたのお指非違

使五位の尉源義経とて業餘ひ

はつらつとあつたを待ちてみし今

のちしつらつとあつたを待ちてみし今

方よりも言察歎ひて終兵船一艘

漕ぎさつてはつらつとあつたを待ちて

隆のさつたを待ちて源平入方

さつたを待ちて共五十七騎計中

やれ河島しつたを待ちてさつたを待ちて

一層の平家の方より粟七兵衛

景清とて業餘とたりやつたを待ちて

いよハはたれたのちハ其時よたぞあ

ちハく力あびハけりハいよハ限ハりハよ

景清ハ忠義ハたれハちハもハまハたハ甲ハれ

志ハ多ハくハさハじハくハあハりハいハきハえ

言ハたハりハもハあハらハいハりハひハく

たハりハいハよハきハもハあハらハいハりハひハく

しハのハ板ハよハりハとハしハもハしハもハあハらハいハりハひハく

かハらハいハしハたハまハいハきハいハ思ハはハ金ハ幣ハしハ判ハ友

馬ハとハいハよハわハよハもハあハらハいハりハひハく

能ハ登ハ殿ハのハちハえハんハ舞ハつハくハ馬ハのハ志ハも

ちハりハまハいハりハあハらハいハりハひハく

まハまハいハりハあハらハいハりハひハく

中ハ陸ハのハ陣ハあハらハいハりハひハく

沿ハ河ハのハ色ハをハあハらハいハりハひハく

の音にひくくやまらう上地

なつちのやまの人の御甲斐の御語

其のちのちのちのちのちのちのち上

の後ののびのびのびのびのびのび

丸の丸の丸の丸の丸の丸の丸上

のののののののののののののの上

名座の座の座の座の座の座の座

夜地の夜も入るも入るも入るも

青の青の青の青の青の青の青の青

一の時の時の時の時の時の時の時の時

名づくる名づくる名づくる名づくる

らまのらまのらまのらまのらまのらま

考人の考人の考人の考人の考人の考

考人の考人の考人の考人の考人の考

上

拜もま行たく内のつく松のねの枕を
 をまく思ひのたのりのり昔しのり童を
 夢をゆ方るりく落花を枝よ
 吹くのり取鏡さしひ照さひのり鏡をあを
 長執のり心をとしまきく深能の境界
 ようのり執の心を苦くめく終究
 けらしめるるのり段のおもてらるる

業因のり早曉のり也也
 後と思ひのり寝覚えの枕より甲冑と帯

しみのり鈴のりの判官のりままとも

新義經の出おあるのり真惠のり

妄執のり西海のり浪よたらひの死死

のり海の沈輪のり農の心の社社

生死のり海の心ののり月乃

雲の夜あけと曇なきは
 今宵の光 昔より思ひ出ぬ
 舟と葦の合戦の音 可からず
 忘れぬ 身土の海よから月
 弓のウツク本七 手あらしまは 愛よ
 箭の道へ味くぬよ味ひきふら
 死の海にまゝの身もろく 精の海に

恨りも ちよかへよ 靴の跡の海
 海に又よ 愛物さるが ありく
 志まぬわと 肩浮の故郷よ ありく
 久しき 年あまのよりの 持ちあちよ 痛
 しまで 終る 音の あり ね あり
 思ひ 出る 昔の 月も あり
 入る 本より 清い 愛あま 海平なる

ひよ夫克を捕へぬとら駒をなぐ
て打られく多あふとらひんをひん
して責戦ふ 具母行とが志る
まじ判官とらを打く後よかれ
て清よ 地上 具柄一も 壇
遠よ遠くあつたかぐと 敵よ馬と
やうやく駒と後同よとらうきと敵

船ちくゆ程よ 敵は是とら
よりも船をよせ無きよかきと既よあ
やうくみし給ひよ 上 志るをら角て
を切松ひ終よりとらと敵一と本上者よ
打あつれつ 具母兼房もやうと情
乃はあふ舞やお渡會もく景時ウヤ
しと是あて然くきとらとらとら入

中 経海平より新しきつてわくあ
 聖を佳名のまゝらむらなるら
 世を歌よとわくつねに
 中 ゆきなれん文の次第ある

ぞそれ故よ討まの義経
 軍の極めし思又の歌よ渡
 智者なまの勇まのた
 き心乃梓弓歌よの侍人

分存れためは、
嶺に記す、
志とさるさる、
たそちよ能登守教経とて、
しや手あての志、
道はきりの聲、
まゆの筆、
志とさるさる、
たそちよ能登守教経とて、
しや手あての志、
道はきりの聲、
まゆの筆、

雲のあえり、
雲のあえり、
震動、
雲のあえり、
震動、
雲のあえり、
震動、
雲のあえり、
震動、

公軍の功をひたすら死するにせしむ
 程の長ははより明てかきと
 みしき考ふかきとむらむと
 同く浦内ありきり高まつの
 浦をありたりありぬのあり
 とくありまふ

右之本者觀世太夫織部
 章句真本令放行畢

正徳六丙申歲弥生

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西入町

山本長兵衛



明治十六年九月廿四日翻刻御届
同 年十月 刻成發兌

翻刻人

京都府平民

本田市次郎

上京區藤三子組上白土町廿八番戸

定價金七錢

京都專賣書林

北村善兵衛
風月庄左衛門
石田忠兵衛
町田與三吉
佐条總四郎
細川清助
辻本九兵衛
福井孝太郎
竹岡文助
福井源次郎

村上勤兵衛
辻本定次郎
須磨勘兵衛
遠藤平左衛門
大谷仁兵衛
杉本甚助
大谷玄之助
明田嘉七
笹田弥兵衛
田中治兵衛

菱澤重兵衛
内藤彦一
川勝徳次郎
今井七良兵衛
藤井淺次郎
近藤太十郎
澤田友五郎
西村七兵衛
西村九良右衛門
永田調兵衛

